須田一政　凪の片（なぎのひら）

Suda Issei　*nagi no hira－fragments of calm*

左）＜物草拾遺＞より、1981 年　東京都写真美術館蔵　右）＜紅い花＞より≪埼玉・秩父≫、1975 年　作家蔵

主催：東京都 東京都写真美術館／産経新聞社
後援：サンケイスポーツ／夕刊フジ／フジサンケイビジネスアイ／ iza! ／SANKEI EXPRESS
協賛：株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン
協力：富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
会期：2013 年 9 月 28 日（土）～2013 年 12 月 1 日（日）
会場：東京都写真美術館 2 階展示室
料金：一般 600（480）円／学生 500（400）円／中高生・65 歳以上　400（320）円
※（　）内は 20 名以上の団体料金　※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料　※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

展覧会概要

現実の裂け目から異空間を覗き見るような写真表現で、1970 年代から国内のみならず、オーストリア、ニューヨークでも紹介され、国際的に高い評価を得ている須田一政の個展「凪の片（なぎのひら）」を開催します。1940 年、東京神田に生まれた須田は、洒脱な視点と卓越した技術で人間、生活、街などの裏側へと視線を誘うような写真群を 1960 年代から発表してきました。本展覧会では、東京都写真美術館が新規重点収集作家として収集し続けてきた代表作＜風姿花伝＞＜物草拾遺＞＜東京景＞に、初期作品の＜紅い花＞＜恐山へ＞を加え、さらに写真家生活 50 周年を迎える本年、発表する最新作＜凪の片＞と合わせて構成します。

「凪（なぎ）」という風が止まる時間特有の感触に似た、日常と非日常を往還するような作家の視線が、一片（ひとひら）の写真となって降り積もっているかのような展覧会です。今は無き風景、人物像や、昭和から現在へと引き継がれる日本の風俗を特異な視点で切り取る須田一政の写真表現を、精緻な銀塩プリントでご堪能ください。

作家略歴

須田一政／すだいっせい（1940～）
東京生まれ。1962 年、東京綜合写真専門学校卒業。67 年から 70 年まで寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」の専属カメラマンとして活動する。71 年にフリーランスとなり、76 年、〈風姿花伝〉で日本写真協会新人賞を受賞した。83 年、写真展「物草拾遺」等により日本写真協会年度賞を受賞。85 年、写真展「日常の断片」等にて第 1 回東川賞国内作家賞を受賞。97 年には写真集『人間の記憶』により第 16 回土門拳賞を受賞するなど、これまでに発表した作品は国内外で高い評価を得ている。

主な出品作品と見どころ

本展では、代表作から本展初公開となる新作まで、須田一政の軌跡を一堂にご紹介いたします。
（予定出品点数：215 点）

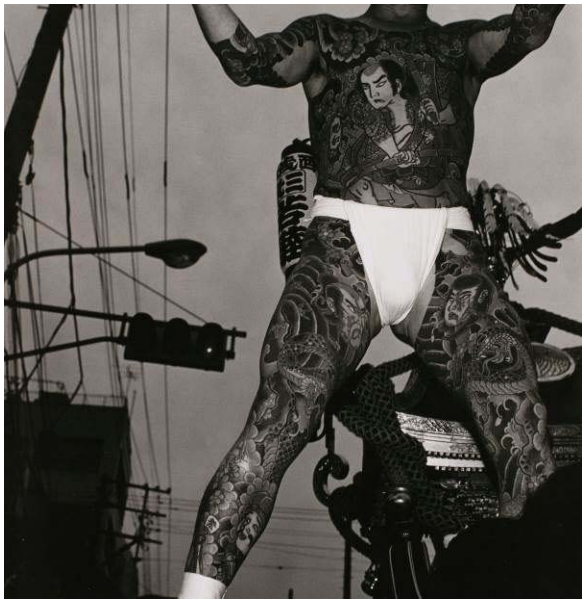
風姿花伝

須田の写真スタイルを確立したシリーズ。「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」で知られる世阿弥の能理論書『風姿花伝』から、作品のタイトルとした。写真の四隅まで緊張感に満ちた作風は「須田調」と言われ、その後の写真表現に大きな影響を与えた。富岡多恵子は当時、祭事を主題にした須田の作品について「人間がかくす暗闇、ハレ姿を写すことで日常の闇があらわされている」と評した（富岡多恵子「さまざまな花　須田一政『風姿花伝』」『写真の時代』毎日新聞社 1979 年）。

＜風姿花伝＞より≪山形・銀山温泉≫　1976 年
東京都写真美術館蔵

物草拾遺

須田は「一切の思い入れや憶測をまじえずにモノに対すると一体どうなるか、(中略)そのモノもなるべく日常的、ありきたり、どこにでも転がっているもののほうがいい。それを私は拾って歩くのである」と記している（須田一政「今月の口絵」『日本カメラ』日本カメラ社 1980 年）。皇居や繁華街、路地裏や公園で作家が出会った人や物が、＜風姿花伝＞より即物的に捉えられている。発表当時の英語タイトルは“Things”（モノ）。



＜物草拾遺＞より、1981 年　東京都写真美術館蔵

紅い花（初展示）

1968 年から 1975 年の初期作品を後でまとめたもの。その中には 1970 年代に『カメラ毎日』の山岸章二編集長が選んで＜残菊ブルース＞＜天城峠＞＜奥羽蝉しぐれ＞として発表された頃の作品も含まれる。また、須田の自宅には、50 年に渡って撮り続けた膨大な写真とネガが保管されているが、中には自ら「開けない」と箱に書いて、封印しているものがあるという。本作はその箱から初公開される。

恐山へ

1963 年 1 月号の『日本カメラ』月例に初掲載された恐山への旅。その後も恐山への旅を繰り返し、撮りためた作品をまとめたシリーズ。ルポルタージュになりがちな民俗行事を「報道的な立場からではなく作家の主観にもとづいて、この異様ともいうべき祭典が内蔵している特徴的なものを力づよく表現してみようという作意に出発している」と評された（田中雅夫「月例 1 部入賞作品評」『日本カメラ』日本カメラ社、1963 年 1 月号）今回は 1962 年作＜恐山＞ヴィンテージ・プリント 5 点も展示する。

東京景

生まれも育ちも神田の、江戸っ子である作家。戦後の混乱期からバブル時代まで、膨大な数の東京の写真を撮っている。故郷、東京を足慣れた様子で歩き回り、誰もが見慣れた風景から、見落としてしまいそうな瞬間を日々写し撮っていた作品を、本作としてまとめた。

凪の片（新作･初公開）

現在の住居、千葉周辺で近年撮影されたシリーズ。須田は 1987 年に生まれ育った神田を離れ、以来 3 回の転居後、1996 年より現在の住居に落ち着いた。自分のテリトリーを確認するかのように、新たな土地と風景を確認しながら撮影を続けている。

＜東京景＞より、1970･年代　東京都写真美術館蔵

＜東京景＞より、1970･年代　東京都写真美術館蔵

＜参考資料＞

須田一政インタビュー

東京都写真美術館ニュース eyes 78 号（2013 年 6 月発行）より

須田一政の写真を見ると、自分たちの生きる日常の中に、こんなに強烈な情景があったのかと驚かされずにはいられない。私たちが見えていないもの、見過ごしているものは無数にあり、それをシャッターにとらえて、そして、独自の写真世界に焼き付けるのだ。9 月に開催される個展で代表作とともに最新作も出展する予定という須田に、その写真人生や制作の原動力についてお話を伺った。

須田さんはこれまで、1976 年に日本写真協会新人賞を受賞された「風姿花伝」や、1983 年に日本写真協会年度賞を受賞された「物草拾遺」など、インパクトのある作品を数多く発表されてきていますが、ご自身の作品に対する評論で、それは全然違うと感じることはありますか？

須田「それは、たえず感じていますよ（笑）。評論とかそういうものには、からめとられたらダメだと思っているんです。ある一定の評価が定まってしまったり、この人はこういう人だとか、作風はこうであると言われちゃうと、自分自身に興味がなくなっちゃうんですよ。これから何を撮っても、そういうふうにしか見られないんだなと思ったら、被写体やテーマに対するときめきがなくなってしまうじゃないですか」

では、須田作品を語る時にはよく“日常に潜む闇”や“妖しさ”、もしくは“ハレとケ”といった言葉が使われますが、これにも違和感を感じてしまう？

「それよりも、自分としては、物ってちょっと角度が違うとこんなに面白く見えるのかとか、こんなにぎょっとするような表面に写ってしまうのかといったことに、いつも驚きながら写真を撮ってきましたし、その結果として自分の作品が出来上がってきたと言ったほうが、しっくりきますね。そういう面白さを探して行くことにはいつも興味があったし、それなりに努力もしました。いや、努力はしていないかな（笑）」

そういった、物の見方、撮り方といった部分で、影響を受けた方はいるのですか？

「僕は撮るよりも見るほうから写真に入ったくちで、若い頃はウィリアム・クラインやリチャード・アベドン、アービング・ペンの写真集を、洋書屋に通ってはよく眺めてましたね。
中でもアービング・ペンが僕は大好きなんだけど、自分で写真を撮るようになってから、同じように自分も撮ってみようと思い立ちましてね。ペンの写真集の中にフランスパンとか冷凍食品を配置して撮った静物写真があって、それだったら自分でも発想しやすいと思ってやってみたんだけど、実際に撮ってみたら、構成力も違うし、色の発色も違うし、真似てみたところで似て非なるもので、本物との違いを思い知らされましたね」

今からちょうど 50 年前、雑誌『日本カメラ』の誌上コンテストで、デビュー作とも言える『恐山』が年度賞を受賞されていますが、やはりこれが本格的に写真の道に進むきっかけとなったのでしょうか？

「気持ちにはずみがついたというのはありましたね。自分の興味のおもむくままに写真を撮っても良いんだと、自信を持つことができたと思います」

この「恐山」は、霊場恐山への旅を記録したものでしたが、旅はその後、作品作りにおいて重要な契機になっていますね。

「その年度賞を受賞したのは 23 歳の時でしたが、その頃に参加していたアマチュア写真グループでの経験が、自分にとってはとても貴重なものだったと思います。
そのグループは、ぞんねぐるっぺという僕も通っていた東京綜合写真専門学校の一期生が立ち上げた会で、自宅そばの神保町にあったんです。主催者が DP 屋を営んでいて、写真集が沢山おいてあったんですが、それが見たくてその DP 屋の前を行ったり来たりしていたら、ゆっくり椅子に座って見たらいいじゃないと声をかけてくださって、写真が好きなの？なんて言われてね。好きですって言ったら、この二階で写真の会をやっているからと見学に誘ってもらったのが、参加したきっかけなんですよ。あの頃、濱谷浩さんの写真集『裏日本』が写真を志す人のバイブルになっていて、今でも僕が北のほうに足がむいちゃうのもその影響が大きいんですが、その会でも、みんなで雪国の写真を撮る旅に出かけたわけです。でも、写真を撮ることだけにきゅうきゅうとするのではなくて、例えば雪の中で、バーナーでコーヒーを淹れて飲んだりしてね。それがまた楽しいんですよ。専門学校ではテクニカルなことを学びましたけど、この会では、そういう旅心というものを教わったと思います。写真も楽しいし、旅も楽しい、そんな風にして、写真の魅力にとりつかれていったんですよね」

1967 年から 71 年まで、前衛劇団の天井桟敷で専属カメラマンをされていましたね。

「主宰の寺山修司さんが書く戯曲が好きだったんですよ。それで、スタッフ募集の広告を見て、写真の記録係として入れてもらえないかと思って応募したんです。まだ劇団が旗揚げしたばかりの時で、10 代の少年少女が寺山さんの家に寝泊まりしながら舞台稽古しているんですが、その熱気たるや、すごかったですね。それに、横尾忠則さんや宇野亜喜良さんが美術をやったり、コシノジュンコさんが衣装をやったり、錚々たる才能が寺山さんを取り囲んでましたしね。僕はただ単にくっついていただけなんだけど、その現場にいられたということは、とても貴重な経験だったとしみじみ思いますね。アマチュアのぞんねぐるっぺでは旅の仕方を教わったわけですけれども、天井桟敷ではパッションみたいなもの、一つのものに盲目的に向かうときの熱気を学んだと思います」

最新作ではマネキンを被写体にされているとうかがいました。

「マネキンを見ていると、囚われ人というイメージがわいてきてね。マネキンの足は単に機能として立たせるためにあるわけで、そこに留め金がついていたりするんですが、ひょっとしたら、こういうところに純粋なエロスがあるんじゃないかと思うんですよ。早朝の誰もいない時間を狙って、銀座のショーウィンドウを撮影しているんですけど、僕は日中シンクロといって、昼間でもストロボをたくんです。普通はトーンが白っぽく飛んじゃうんですが、それを無理に焼き込むと、写真の画がヌラッと出てきて、その質感がなんとも言えなく良い。そんな出来上がりの画像を想像すると、それだけでドキドキしてきちゃってね。こういうドキドキ感に突き動かされながら、今も写真を撮ってますね」

聞き手：丹羽晴美（東京都写真美術館学芸員）　構成：富田秋子
2013 年 5 月インタビュー

＜恐山へ＞より、1972 年　個人蔵（参考図版）

展覧会図録のご案内

本展の開催にあわせて、全出展作品を掲載した展覧会図録を出版いたします
発行：株式会社冬青社（展覧会会期に合わせて発売予定）
価格未定

関連イベント

■作家とゲストによる連続対談。各回とも 15:00～17:00 開催
① 10 月 5 日（土）ゲスト：鈴木一誌（ブックデザイナー）
② 11 月 2 日（土）ゲスト：鈴木理策（写真家）
会場：東京都写真美術館 1 階アトリエ　定員：約 70 名
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます
※当日 10 時より当館 1 階受付にて整理券を配布いたします。番号順入場、自由席
※開場 14：45（予定）

■担当学芸員によるフロアレクチャー　会期中の第 1・3 金曜日　14:00 より

開催概要

展覧会名	須田一政 凪の片（なぎのひら） Suda Issei　nagi no hira－fragments of calm
開催期間	2013 年 9 月 28 日（土）～12 月 1（日）
会　場	東京都写真美術館 2 階展示室 〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内 ホームページ　www.syabi.com　電話 03-3280-0099
開館時間	10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで
休館日	毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）
観覧料	一般 600（480）円／学生 500（400）円／中高生・65 歳以上　400（320）円 ※（　）は 20 名以上団体および東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料　※第 3 水曜日は 65 歳以上無料
交通機関	JR 恵比寿駅東口より徒歩約 7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約 10 分 ※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

お問い合せ

東京都写真美術館　電話：03(3280)0034　FAX：03(3280)0033
展覧会担当　丹羽 晴美 h.niwa@syabi.com　伊藤 貴弘 t.ito@syabi.com
広報担当　久代 明子　a.kushiro@syabi.com　平澤 綾乃　a.hirasawa@syabi.com
前原 貴子　t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。

Suda Issei

nagi no hira—fragments of calm

The Tokyo Metropolitan Museum of Photography is delighted to announce the opening of an exhibition featuring the work of SUDA Issei, entitled 'nagi no hira — fragments of calm'. The work he has produced since the 1970s seems to provide a glimpse through the cracks in reality to a space that exists in a different dimension and has received international acclaim, being shown not only in Japan but also in Australia, New York, etc.

Born in the Kanda district of Tokyo in 1940, SUDA has used an unconventional viewpoint and outstanding technique to create a body of work from the 1960s onwards that offers the viewer a behind-the-scenes view of people's lives and the city. As one of the artists recently selected by the Tokyo Metropolitan Museum of Photography for priority collection, in this exhibition we will be able to show not only the works previously obtained for the collection, including 'Fushi Kaden', 'Monogusa Syui', and 'Tokyo kei' (Tokyo View), but also early works, such as 'Akai Hana' (Scarlet Bloom) and 'Osorezan e' (To Osorezan), plus some of his latest works, celebrating his fifty years as a photographer.

SUDA's eye seems to travel between the ordinary and extraordinary, creating an atmosphere similar to that experienced in moments of 'calm' when the wind ceases to blow. This exhibition consists of an accumulation of numerous fragments of this calm, each captured within a single photograph. We hope that you will enjoy these landscapes of the past, the people and images of various customs passed down from the middle of the last century, all captured by SUDA Issei's unique vision, and preserved in minutely detailed gelatin silver prints.

Closed: Mondays (unless Monday is a holiday when it closes the following day)
Admission: Adults ¥600／College Students ¥500／High School and Jr. High School Students, Over 65 ¥400

- Organized by the Tokyo Metropolitan Government / Tokyo Metropolitan Museum of Photography / the Sankei Shimbun
- Assisted by The Sankei Sports / The Fuji Evening News / Fuji Sankei Business i / iza! and SANKEI EXPRESS
- Sponsored by NIKON CORPORATION / Nikon Imaging Japan inc.
- Cooperated by FUJIFILM Imaging Systems Co.,Ltd.

For further information:
Niwa Harumi, curator, h.niwa@syabi.com
Kushiro Akiko, public relation, a.kushiro@syabi.com
Tokyo Metropolitan Museum of Photography
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel 81-3-3280-0034 Fax 81-3-3280-0033 http://www.syabi.com